

スプラフォン

我が祖国

ベドルジハ・スメタナ — 『ヴィシエフラド』 (高い城)、 『ヴルタヴァ』 (モルダウ川)、 『シャールカ』、 (連作交響詩『我が祖国』より、ハープのためヤナ・ボウシュコヴァーによる編曲)

アントニン・ドヴォルザーク — 交響曲第9番「新世界より」の『ラルゴ』、ヤナ・ボウシュコヴァーによる編曲

アントニン・ドヴォルザーク — 『アメリカ組曲 イ長調』 作品 98B、ヤナ・ボウシュコヴァーによる編曲

ヨセフ・スク — 『夏の印象』 作品 22B、ヤナ・ボウシュコヴァーによる編曲

タイトルだけを見ても、ソロで活躍できる楽器としてご自身も演奏されるハープを紹介したいという願いと、チェコの音楽遺産と文化にご自身のルーツがあることが伺えますね。

私は愛国者で、チェコのものならなんでも好きです。この愛は音楽家の両親から受け継いだものです。チェコの音楽は、一番美しい音楽の一つだと思いますし、私にとって一番馴染み深いものです。子供の頃、ドヴォルザークの『新世界より』を聴いたときの非常に強い感動をよく思い出します。ベドルジハ・スメタナとヨセフ・スクの音楽もそうですが、ドヴォルザークの音楽にある、音符やフレーズのひとつひとつが愛国的だと思います… ハープ奏者の娘として、一生付き合う音楽のパートナーに、ハープを選びました。残念ながら、ハープのレパートリーには、チェコの有名な曲はそれほど多くありません。そういう曲をハープのために編曲するという願望は、2014年に初めて心に浮かびました。米国での夏音楽祭のために新しい曲を探しながら、色々な録音を聞いていて… ドヴォルザークの『アメリカ組曲 イ長調』とスクの『夏の印象』を選びました。ピアノまたはオーケストラの演奏を聴いただけで、心の中にハープのバージョンが浮かんだので、早速編曲を始めました。

スメタナの『ヴルタヴァ』はそれより後でしたか。

『ヴルタヴァ』という曲を抜いて、私の子供時代は語れません。特に母親のリブシェ・ヴァーハロヴァーの演奏です。彼女は、スメタナと同じ時代に活躍していた有名なチェコのハープ奏者のハヌシュ・トルネチェクによって編曲された『ヴルタヴァ』を自分の演奏会で常に演奏していました。1982年に、その曲を世界で初めてレコードに録音したのも彼女です。このCDと同じように、スプラフォンから出版されました。当時、彼女は今の私と同じ年齢でした…とても象徴的だと感じています。『ヴルタヴァ』は私にとってとても大切な、個人的なものです。在香港チェコ大使館に、10月28日のチェコスロバキア独立記念日に招待された時、大使にスメタナとトルネチェクの『ヴルタヴァ』を演奏するように依頼されました。その時まで、母親の演奏を尊敬をもって聴いていました。しかし、母の「代表的曲」を

自分のレパートリーに含めることは、想像だにしませんでした。一方で、この編曲にはいくつかのパートが含まれていませんでした。「農民の結婚式」という部分と、『ヴェルタヴァ』の最後の「大河」。特に後者は、トルネチェクのバージョンでは小川のように表現されています。曲のこれらの部分は、母親にもずっと前から、変えるように頼まれていました。残念ながら、その願いを母の生前に叶えることはできませんでした。母があの方世に行ってから2年経ってようやく、私は彼女の願いを叶えることが出来ました。2020年にパンデミックに見舞われたとき、自分の編曲に集中することが出来たので、トルネチェクの『ヴェルタヴァ』も新しい形にしました。

録音された曲はすべてヤナさんの作品ですか？

そうですね。すべての曲を自分の子供のように思っています。みんな、私にとって大事な存在です。『ヴィシェフラド』と『シャールカ』は、数年間作り直していました。文字通り、すべての音符に愛情を注ぎました。ハーブのため作曲するのは簡単ではありません。表記はピアノと同じですが、ピアノでは良い音が出て、ハーブには適していない場合があります。そのため、多くの作曲家がハーブという楽器に怯えて挑戦せず、ハーブのために作曲しないことにしたのかもしれない。ハーブに親しんでいる私も、あらゆる小節を慎重に考えました。このCDに収録されている編曲は、世界に出したいと確信するまで、何回も修正しました。

編曲、アレンジ、それともバージョン、どう表現するのが正しいですか？

それぞれの曲で異なります。スメタナとトルネチェクの『ヴェルタヴァ』についてはもう述べましたが、部分的に修正して補足しました。トルネチェクの元のカデンツァも変更しました。『ヴィシェフラド』をほぼ全体にわたって修正しました。トルネチェクが作曲した『ヴィシェフラド』という幻想曲が原作からかなりかけ離れていますが、いくつかの小節を自分の編曲に入れました。スメタナの『シャールカ』とドヴォルザークの『ラルゴ』も完全に編曲しました。前述した曲はこのCDが世界初で、他で聴くことは出来ません… ドヴォルザークの『アメリカ組曲 イ長調』とヨセフ・スクの『夏の印象』はピアノ版から引き継ぎました。オリジナルから音符は一つも抜いていませんが、ハーブで演奏できるような形にする必要があったので、いくつかのパートを異名同音に変える必要がありました。ハーブだとさらに美しく聞こえると思います。数人のピアニストにも、そう言ってもらえて、とても嬉しかったです。

交響詩が既に編曲されていましたが、それは障害ではなかったですか？

トルネチェクは『ヴェルタヴァ』と『ヴィシェフラド』を編曲しました。しかし、作者自身が言ったように、両方ともより幻想的です。それに、『ヴィシェフラド』はオリジナルとまったく似ていません。トルネチェクの編曲はオーケストラの交響詩のトランスクリプションではないので、私は何かユニークなものを提供したくて、リスナーが調べのなかに有名な曲を見つけられるような、ハーブの幻想曲ではない編曲を作ることになりました。

たとえば、トルネチェクは、『ヴェルタヴァ』全体をオリジナルより半音低く編曲しました。このバージョンは長い間、私のレパートリーにあったのですが、抜けていた部分を編集して入れようとしたとき転調に悩まされました。これを解決する自分

のアイデアにもすでに満足していましたが、最終的には、このCDの音楽監督である作曲家のズデニェク・ザフラドニークの経験豊富なアドバイスに助けられました。CDでお聞きいただけるように「ルサルキ」の前に音符を一つ入れることで解決できると薦められました。

『ヴィシエフラド』は私にとって最大の挑戦でした。みなさん気付いていないかも知れませんが、半音階が多く入っているので、ハープの奏法的には非常に難しいんです。転調のために、調号を制御するペダルが7本あります。ですので、半音階のチェンジは足の担当です。『ヴィシエフラド』の編曲に満足するまで、たくさんバージョンがありましたが、最終版を誇りに思っていますし、リスナーに気に入っていただけると信じています。

『シャルカ』は本当に自分の子供みたいな作品です。最初の音符から、命を吹き込むことができました。このアイデアを思いついたのは、私生活のあまり明るくない時期でした。何か新しいものを作りだせる、創造性のある逃避先を探していました。あるとき、コンサートの後、車を運転しながらラジオを聞いていたのを覚えています。ちょうどスメタナの『シャルカ』が放送されていました。車を走らせながらこの曲がハープでどれだけ美しくだろうかと想像していました。アイデアが生まれ始めました。最初は、全てをはっきりと想像できたので、数日で全てを楽譜に書き起こしました。しかし、その時から完成までに行った、修正は数えられないほどありました。『シャルカ』が最終的な形になったのは、『ヴルタヴァ』、『ヴィシエフラド』、『ラルゴ』と同様に、パンデミックの最中でした。『ラルゴ』に関しては、編曲することにしたのは、2020年の秋になってからでした。CDがこのような形になって、世界でもユニークなこれらの曲を聴衆にお届けすることができてとてもうれしいです。

ハープは音量が弱いと思う人もいます…

ハープは天使的な楽器だと見られがちですが、私はそう思いません。ハープの音は柔らかいだけだ、という意見には賛成できません。音量は、演奏者の握力によって、どのように楽器を響かせることができるか次第です。このCDで、ハープがオーケストラの代用になることができる、とリスナーに納得させることを確信しています。

CDの誕生は、スメタナの交響詩にふさわしい作品の探求というような意味合いでしたか？

『我が祖国』というCDを制作し、サイクルの3つの部分を使用するというアイデアは徐々に生まれたものですが、一つの考えは最初からありました。ハープを完全なソロ楽器として紹介する、ハープのための曲をつくらなかった祖国の偉人の曲で、故郷を応援する作品を作ることでした。

ハープで演奏するのが最も難しいのはCDのどの曲ですか？

『ヴィシエフラド』と『シャルカ』がおそらく最も難しいでしょう。自分で編曲したからこそ、手加減はしませんでした。私はこれらの曲を本当に独自のものに、ハープをソロ楽器のより高い地位に引き上げるものにしたかったのです。しかし、他の曲も難しいです。私はかなりのマキシマリストなので、いつもより大きな目標を設定しています。ほとんど誰でも手軽に演奏できるような曲をリスナーに提

供することは決してありません。このCDを世界でも特別な作品にしたかったので
す。

ヤナさんの編曲を、他のハープ奏者も弾けるようになりますか。

楽譜はまだ提供されていません。所有しているのは私個人だけです。アメリカの出版社が私の『ヴルタヴァ』の編曲に興味があるとってきています。そのうちに全ての編曲がリリースされる可能性はあります。

**他に同じような作品を予定していますか？『我が祖国』の後半？それともヤナーチェク
の作品とか…？**

そうですね、私は非常に内発的ではありますが、同時に、多くの夢、願い、アイデアを持つ、創造に勤しむ人間です。なので、そうかもしれません。このCDの続編がまもなく登場する可能性はあります。

ペトル・ヴェベル

ヤナ・ボウシュコヴァーは、ハープ奏者で、ハープの界の俊才。世界で最も有名なハープコンクールであるUSA国際ハープコンクールの優勝に加え、フランスの国際室内楽コンクールやイタリアの国際音楽トーナメントでも入賞し、イスラエル国際ハープコンクールでは二位を取る。定期的に、ソロあるいはアンサンブルの一部として、国内外のさまざまなコンサートステージやフェスティバルで演奏。ソロアーティストとしても、ニューヨークのリンカーンセンター・アリストラーホール、パリ・シャトレ座、ウィーン楽友協会、プラハの春音楽祭、そしてベルリンの祭典での演奏などの実績を誇る。オーケストラのソロハープ奏者としてニューヨークのカーネギーホール、東京のサントリーホール、ライプツィヒのゲヴァントハウス、アムステルダム・コンセルトヘボウでも演奏。2007年からプラハ芸術アカデミーで講師をつとめ、2019年9月からロンドンの名門、王立音楽大学の教授となる。国内外の出版社のため、アルバムを20枚以上録音。2005年より、チェコ・フィルハーモニー管弦楽団のソロハープ奏者として活動中。